

船井情報科学振興財団 博士号取得報告

2024年6月

一橋大学経済研究所 山岸 敦

今年の5月半ばにプリンストンにて博士号を取得し、6月から一橋大学経済研究所で働くことになりました。発注したオフィス用品もまだ届かない、少しがらんとした新しいオフィスでこのレポートを書いています。

羽田空港に降り立って、実家に少し帰ってから引っ越しをして、国立駅から一橋のキャンパスへ歩いて行きました。実家の近くの銀杏並木がきれいさっぱり無くなっていたり、国立駅近くのペッパーランチが閉店していたり、留学に行った5年前から時間は過ぎて変わったものもあるけれど、それでもだいたい昔と同じような東京の日常が、留学に行く前と変わらず流れています。そんな日常に、まるで5年間の異国の生活なんてなかったかのように、ずっと溶け込んでいくような感覚がしています。

世間一般からすれば相当長い期間を遠い国で過ごしたのに。うれしいことも悲しいことも悔しいことも様々にあったのに。それなのに、感情が波立たないことは少し拍子抜けでした。まるでちょっと長い白昼夢を見ていて、ふと目が醒めただけのような気分です。

あまりの無感動に帰国してから2週間ずっと戸惑っていましたが、これはきっと素晴らしいことなんだと思えてきました。「留学決定に至る前の経緯」と題して、僕が5年前に最初に書いた船井財団奨学生レポートで僕は留学を決心した理由をこう記していました：

「アメリカに渡って向こうの教授や学生と真剣に格闘した方が自分はまだ伸びるのではないか？留学しなかったことで、自分は自ら誇りに思えるような研究ができずじまいに終わり、研究者キャリアの最後に後悔してしまうのではないか？そんな思いが次第に頭をもたげ始めました」

当時は日本の博士課程で日々研究を頑張っていたのですが、どこか自分を試し切れていないというか、何かと二の足を踏んで挑戦しきれない自分が嫌いだったのだと思います。あれだけ多くの方がすごい、と褒めそやすアメリカという超大国の研究環境に触れて、一度真剣に戦ってこないといけないという風に当時は強く思っていました。挑戦の機会を逃す後悔はしたくないと思って留学しました。

今、留学から帰ってきました。もしアメリカでやり残したことがあったら、きっとまたすぐにでもアメリカに戻って再挑戦しなきゃいけない、そうしなかったら後悔する…5年前の僕だったら、きっとそんな風な感情がふつふつと沸き起こっていたに違いありません。今は、そういう気持ちが全くないです。アメリカでの研究に未練はないです。アメリカの経済学アカデミアには良いところもたくさんありますが、アメリカの経済学アカデミアが僕に求めるものと僕がやりたいことは少しずつ異なるな、と思いました。留学生活における僕の研究面は、僕的能力で可能な範囲かつ自分が面白いと思う範囲で、自己評

価ではかなり上出来だったと思います。アメリカの大学での就活は苦労しましたが、逆に日本の大学ではおそらく異例とも言えるくらいの高評価をしていただきました。これは（自称）良いヘビメタを作ったのに、今の業界で流行っているのは EDM だったみたいなものです。音楽性の違いでは仕方ありません。日本の大学の様々な方々に加え、海外でも音楽性が合致する方々は見つけられたので、こういう人たちと手を取りつつ頑張れば良いだけのことです。やり残したこと、思いつきません。

船井財団の皆様のお力添えで白昼夢のような、素晴らしく充実した留学生活を送らせていただいたことに改めて感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。留学で学んだことを活かして、これからも精進していきたいと思います。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。